活動記録

①ひょうご歴史研究室の設置目的

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は149頁に掲載）。

②研究室メンバー

研究室メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の学芸員、資料館の職員、県内市町の文化財担当者、大学教員、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いで成り立っている。

今年度は研究室の班構成と所属メンバーに大きな変動があった。

第一に、研究室の中心となる非常勤職員について、昨年度までは、研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・県政推進員（長澤喜史）の三名で成り立っていた。しかし財政事情により、このうち大村拓生歴史研究推進員が退任せざるを得なくなり、今年度は坂江と長澤の二名で構成された。

第二に、全体方針等を討議するコア会議メンバーについては、副室長が神足孝明前次長から市村高子次長に、県教委事務局の甲斐昭光前課長から柏原正民課長に代わり、また新しく服部寛副課長が加わり、大村拓生・前歴史研究推進員と山上雅弘前共同研究員が退任した。合わせて一一名で構成されることなった。

第三に、昨年度は一二名で構成されていた「赤松氏と山城研究班」が解散した。

ただし旧メンバーを中心にして、「ふるさとの歴史講座　神戸校」（兵庫県芸術文化協会主催）において、これまでの研究成果を市民向けに講演した（145頁参照）。

また本誌第八号で紹介できなかったが、昨年度末、それまでの「赤松氏と山城研究班」の研究成果の情報発信の一環として、研究室ホームページの「デジタルミュージアム」のコーナーにおいて、「前期赤松氏と西播磨の山城」というコンテンツが立ち上げられた。

第四に、昨年度八名で構成されていた「大阪湾岸と淡路の地域史研究班」では、新たに禰宜田佳男・大阪府立弥生博物館長、大村拓生・関西大学非常勤講師、多賀茂治・県立兵庫津ミュージアム学芸班長、永惠裕和・県立考古博物館主査、竹内信・県立歴史博物館学芸員の五名が加わり、総勢一三名になった。

第五に、昨年度九名で構成されていた「たたら製鉄研究班」は、岩城卓二・松井良祐・伏谷聡の三名の委

員が退任し、新たに加納亜由子・兵庫県企画部地域振興課主任（県立兵庫津ミュージアム）が新メンバーに就き、総勢七名になった。

第六に、本年度四月から開始した第二期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトでは、第一期の五名（藪田貫・坂江渉・古市晃・大村拓生・木村修二）の委員のほか、平井松午・徳島大学名誉教授、町田哲・鳴門教育大学教授、金田章裕・京都府立京都学・歴彩館長、竹内信・県立歴史博物館学芸員の四名が加わり（竹内の加入承認は令和五年一二月）、合わせて九名で調査研究をおこなった。

そのほか本プロジェクトには、山下史朗・兵庫県企画部地域振興課・歴史資源活用専門官がオブザーバーとして、福永明子・臨時職員が、関連する史、資料の収集と研究調整の仕事に従事した。

このように本年度の研究室の人員は大きく変動し、全体として三六名で構成さている（重複を除く）。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の柏原正民課長で、そのもとに三名の文化財課職員（服部寛副課長兼文化財班長、大本朋弥主査、園原悠斗技術職員）が、各班の補佐役を担当した（148頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

③研究方針

開設初年度の平成二七年、研究の基本方針を討議するコア会議、全体会会議の開催を経て、研究室の当面の研究テーマを、

①『播磨国風土記』、
②赤松氏と山城、
③たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班が編成された。

ただしこのうち『播磨国風土記』研究班は、令和三年度末に解消し、翌年度から「大阪湾岸と淡路の地域史研究班」を立ち上げ、また前述のように「赤松氏と山城研究班」は令和四年度末に解散した。

研究室では平成三〇（二〇一八）年度から研究の全体方針を掲げている。本年度は、「八年間の研究成果を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターと淡路島日本遺産委員会との連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

④本年度の活動概略

本年度もコロナ禍と厳しい財政事情により、令和二年度（二〇二〇）以前のような活動を順調にすすめることができなかった。

第一に、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。現地調査と資料調査の概要は、146頁の一覧を参照していただきたい。

第二に、研究室の連携組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの対面による合同事業を実施できなかった。

このうち三年連続で中止に追い込まれた淡路島日本遺産委員会との共催行事、「ひょうご歴史研究室in淡路島Ⅳ・淡路島日本遺産海人の調査研究事業」については、「令和五年度ひょうご歴史文化フォーラム」として、令和六年三月一七日（日）、淡路市立サンシャインホールにおいて、「瀬戸内海の海人と水軍　―古代・中世の淡路・阿波・紀伊―」と題して開催されることになった。

第三に、コア会議・二つの研究班の研究会・第二期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの合同研究会のすべては、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式でおこなった。

コア会議と二つの研究班の研究会の対面会場は当館会議室にて、第二期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの合同研究会の対面会場は、淡路県民局の会議室とした。このうち多くのご負担をかけた淡路県民局には、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

第四に、合わせて二回開かれたコアメンバー会議（令和五年五月七日、一二月一六日）では、現況の財政事情も踏まえ、研究室の今後をどうするかについて討議した。

とくに一二月一六日の第二回コアメンバー会議では、「九年間の活動を振り返ると、まず県と県内市町の文化財担当者とのつながり作りの点において、研究室の開設は、制度設計としてかなり広がりを持ったような気がする」「令和六年度も研究室が存続するとしても、館長が入れ替わり、研究コーディネーターに対する、眼に見えない負担が増える可能性がある。来年度の全体方針案において、「この年度をもって研究室の活動は一つの節目とする」というような文言を明記することもありかと思う。みなさんのご意見をいただきたい」「研究室の活動は大きな意義のある事業なので、令和六年度をもって敢えて「節目とする」「解散する」ような研究方針を立てる必要はない。二〇二五年の大阪・関西万博に向けて状況が変わる可能性もあるからだ」「大阪・関西万博は、地域史研究や地域遺産の掘り起こし事業のなかの一つの契機に過ぎない。目標となるのは、事業を一つ一つ進めていき、結果としてまちづくり事業や地域活性化に資する点にある。来年度以降も何らかの形で事業は続けていくべきだと思う」「予算事業に対する規模縮小の動きは避けられないにしても、予算編成は単年度ごとに決まるのだから、敢えて令和六年度をもって事業終了するなどと、自ら宣言する必要はない」などの意見や感想が出された。

この会議での討議内容を踏まえ、今後さらなる議論を積み重ねていくことになった。

以下、二つの研究班と第二期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

の研究活動と成果を概略的に紹介する。

なお各班の研究会と調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの研究活動内容については、147頁の一覧表を参照のこと（本誌第八号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

一、大阪湾岸と淡路の地域史研究班

⑴　研究方針

令和五年五月の第一回研究会で、「これまでの淡路島日本遺産委員会との連携成果を踏まえ、前近代の大阪湾岸、淡路島の地域史研究に取組む。その成果を地域資源を活かしたまちづくり事業に反映させる。また『播磨国風土記』研究の成果の普及をめざす」という研究方針を決めた。

具体的には、①島根県古代文化センターと連携して、海人（あま）の南北間交流や比較生業論の研究、②「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第二期との協働、③江戸時代の『淡路分間絵図』と『淡路名所図会（ずえ）』の積極的分析をすすめ、このうち『淡路名所図会』については、来年度にデジタルデータベース化と公開をめざす、④『播磨国風土記』研究の成果の普及、という四つの内容をすすめることにした。本年度の研究成果は、以下のとおりである。

⑵研究成果の公表

①「『播磨国風土記』を書にする」展の開催

□令和五年四月二九日～五月二八日
□当館二階城見ラウンジにて
□観覧料無料
□県立姫路東高校書道部との連携

『播磨国風土記』研究の成果発信の一環として、書家である魚住和晃・神戸大学名誉教授を監修者に迎え、昨年度から準備し開催に至ったのが本企画である。

この展示会は、魚住氏の助言により、「餝磨（しかま）」「日女道（ひめじ）」「英賀（あが）」などの地名だけではなく、地名起源説話の中身についても、意味を理解したうえで「書」にしてもらい、それを通じて若い人たちに地元の歴史文化に愛着を感じてもらうという目的のもとおこなった。

そのため昨年度の冬から春にかけて、『播磨国風土記』（三条西家本）の写真版の資料コピーを持ち込んだ出前講義を二度おこない、一一名の書道部生徒に対し、（ⅰ）どの地名起源説話を選ぶか、臨書か創作書にするかは個々人の自由にすること、（ⅱ）資料には誤字・脱字・衍字（えんじ）が多数含まれていること、（ⅲ）現在の常用漢字の「処」「形」「鹿」などの字が、資料では異体字（いたいじ）で書かれていること、（ⅳ）不慣れな漢文を読み解く際の返り点や句読点の取り方、（ⅴ）餝磨郡条を中心とする語呂合わせとダジャ

レに満ちた地名起源説話の内容紹介など、について説明を加えた。

生徒たちは全員「臨書」スタイルでの作品化を選び、途中令和五年二月の「中間添削」（魚住氏による）を経て、三月上旬に最終作品を提出し、審査・軸装のうえ、展示会を迎えた。

講評会での感想やアンケート結果によると、これに参加した生徒たちは、今までほとんど知らなかった『播磨国風土記』の内容そのものに、かなりの関心や愛着をもったと感じられた。

『風土記』の文字資料というモノを素材にした作品展は、歴史系の博物館に相応しい、新しい博学連携企画の一つに位置づけられよう（詳細は本誌の坂江・魚住両論文を参照のこと）。

なお「『播磨国風土記』を書にする」展の概要とその意義については、当館地下講堂で開かれた大阪歴史科学協議会の九月例会（令和五年九月二三日）において坂江が報告した。

②『播磨国風土記』の古代史』の英語版の作成と公表の準備

『播磨国風土記』の研究成果の情報発信の一環として、ひょうご歴史研究室編の『「播磨国風土記」の古代史』（神戸新聞総合出版センター、二〇二一年）の内容を英訳したものを、研究室のホームページ上にアップすることを目的として準備しつつあるのが、この企画である。

研究室では昨年度の末、『風土記』に登場する興味深い神話や伝承を、当時の郡別に紹介する『播磨国風土記　はりまのくにふどき』というコーナーを立ち上げている。右の英語版はこのコーナーの一つのコンテンツとして掲載される予定である。

翻訳にあたったのは、本誌第八号にも紹介した、海外における『播磨国風土記』研究の第一人者、ニュージーランド在住の日本文学研究者、エドウィーナ・パーマー氏である。

二年ほど前、パーマー氏から、『「播磨国風土記」の古代史』の各論文などを英訳することに協力したいという、ありがたい申し出があった。研究室ではこれを受け、準備体制を整え、パーマー氏からすでに多くの論文を英訳していただいる。また遺跡名や地名表記などをめぐり執筆者との間で、やりとりをおこなっている。この成果は、本年度中にアップされる予定である。これを通じて、ひょうご歴史研究室の研究成果を、国内外の方々に情報発信できたら幸いと考える。

なお本書の英語版を公表する件については、神戸新聞総合出版センター、および全著者から了解を得た。また英訳の労をとっていただいたエドウィーナ・パーマー氏に対し、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

③「令和五年度ひょうご歴史文化フォーラム」の開催に向けての協力

□「瀬戸内海の海人と水軍　―古代・

中世の淡路・阿波・紀伊―」
□令和六年三月一七日（日曜日）
□淡路市立サンシャインホール
□講演・コメント
・古市晃客員研究員
「海人の地域間交流と倭王権」
・大村拓生客員研究員
「源平内乱期と中世の海域的世界」
・伊藤宏幸共同研究員
「弥生時代の鉄器生産遺跡と海の民」

ひょうご歴史文化フォーラムは、兵庫県民の研究交流の場として、毎年館が主催する行事として開かれ、ひょうご歴史研究室がそれを支援している。今年度は淡路島日本遺産委員会も主催団体に加わり、「ひょうご歴史研究室.in淡路島Ⅳ・淡路島日本遺産海人の調査研究事業」として開催される。シンポジウムの講演内容は、「大阪湾岸と淡路の地域史」研究班と、第一期と第二期の「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの成果が活かされている。

④本誌への論文執筆

坂江と魚住和晃氏が、「『播磨国風土記』を書にする」展に関する論文を「歴史遺産活用」コーナーに執筆した。

⑤「播磨国風土記」コンテンツの立ち上げ（昨年度）

『播磨国風土記』研究の成果を、高校生などの県民向けに情報発信するため、研究室のホームページ上に、『風土記』に載るすべての地名、および興味深い神話や伝承を、郡別に掲載した。

⑥香寺町史研究会

同会の大槻守元客員研究員からの依頼を受け、令和六年二月一四日（水曜日）、坂江が「古代播磨の道と寺」と題して講演した。

二、たたら製鉄研究班

⑴研究方針

第一回の研究会で（五月一四日）、今年度の研究方針を、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめるとともに、その成果にもとづき、令和六年度開催の特別展「ひょうご鉄ものがたり」と連携し、「たたら製鉄入門解説書」（図録副読本）の刊行をめざす」と決めた。

この方針のもと調査研究をすすめ、以下のような成果を得た。

⑵研究成果の公表

①本誌特集号の刊行

開設以来九年間の研究成果を集大成すべく、本誌第九号を「ひょうごのたたら製鉄」と題する特集号とした。文献史学と考古学の両側面から、新たに見いだした兵庫県内の「たたら製鉄」の特徴を、当班六名のメン

バーが執筆した。また大阪商業大学所蔵文書と高砂市の入江家文書の関連箇所が翻刻され、解説が付せられた。これによりひょうごのたたら製鉄研究は大きく前進したと思われる。

また当班では、令和三年度から島根県古代文化センターや岡山県教育委員会とともに、大阪府交野市教育委員会との連携を深めている。また今年度からは島根県雲南市との連携を深めることができた。

このうち交野市教育委員会との連携の一環として、同委員会の真鍋成史氏からも本誌に論考をお寄せいただいた。本論は令和四年一一月の第二回研究会での報告がもとになっている。

②「たたら製鉄入門解説書」（図録副読本）の刊行準備

令和六年度開催の特別展「ひょうご鉄ものがたり」と連動して、主に高校生を対象にした、図録副読本の刊行準備をすすめた。仕様はA5サイズ、横書き、全六〇～一〇〇頁程度、オールカラー。可能な限り「たたら製鉄」とは何なのかが分かるように、高校生向きの個別論考を準備しつつある。掲載テーマは、「山内風景」「鉄穴流し」「たたら炉の操業」「千草鉄と備前刀」など約三〇程度とし、これまで一〇回のオンライン論文検討会を開催し、現在半分以上の論考が集まっている。原稿締め切り日の令和六年六月末をめざし、今後も論文検討会をつづけていく予定である。

③高精度DEM分析を踏まえた「奥天児屋遺跡」の調査研究

令和三年度から、たたら製鉄遺跡を調査発見する方法の一つとして「航空レーザー測量」の成果を活かすことを決めた。その成果にもとづき、昨年度以来つづけていた「奥天児屋遺跡」（千種町）周辺の調査をすすめ、その結果新しい遺構を発見した。その成果は本誌論文として田路正幸・永惠裕和両委員が執筆した。

④今後の課題

前掲の入江家文書、および大阪商業大学所蔵文書の発見とその翻刻作業の進捗により、播磨のたたら製鉄の全容の一部がかなり見えてきたという印象をもつ。これに加え姫路市網干の「加藤家文書」の解明に着手すれば、さらに研究は前進すると思われる。

ただし昨年度の「赤松氏と山城研究班」につづき、残念ながら当班も本年度三月末に解散することになった。今後組織的な研究はできないが、これまでの成果を踏まえ、新たな調査研究がすすむのを望むばかりである。

三、赤松氏と山城研究班（昨年度）

昨年度の本誌第八号で取り上げられたなかった、すでに解散した「赤

松氏と山城研究班」の成果発表を紹介する。

①デジタルミュージアム「前期赤松氏と西播磨の山城」コンテンツの立ち上げ

昨年度後半から、当班の研究成果を発信事業の一環として、当時の大村拓生歴史研究推進員と竹内信研究員（学芸課デジタルミュージアム担当）が相談・調整のうえ、右のコンテンツを立ち上げた。ここでは前期赤松氏が西播磨の各地にもっていた様々な拠点の姿が、視覚的に分かり易く紹介されている。

②「ふるさとの歴史講座神戸校」の歴史講座への協力

元副室長の豊田幸雄氏の紹介で、令和二年度から始まった公益財団法人・兵庫県芸術文化協会の「兵庫県生活文化大学」の歴史講座の開催に、本年度も研究室が共催団体として協力した。

テーマを「ひょうごの山城と赤松氏」として、現在のところ合わせて九回の講演会を実施し（145頁のチラシ参照）、延べ人数で三八二名、平均して毎回約四三名の市民が参加している。講演を担当したのは「赤松氏と山城研究班」の旧メンバーを中心とし、すでに解散したとはいえ、本講座も「赤松氏の山城研究班」成果普及の一環をなす。

四、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

⑴　第一期（令和二年～四年度）

○報告書『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』の刊行（昨年度）

令和二年度以来の合同研究会、各委員個別の調査研究を踏まえ、令和五年二月末日、三年間のプロジェクト成果を集大成する『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』を刊行した（A4版横書き。全一七二頁。カラー図版を含む）。報告書を関係各機関や研究者に配布するとともに、PDFファイル版をホームページ上にアップした。

⑵　第二期（令和五年～六年度）

令和五年七月一日、淡路県民局の会議室で第一回合同研究会を開き、藪田貫座長が、プロジェクトの経緯・主旨について説明し、研究テーマを「「鳴門の渦潮」と淡路島の文化的景観」とすることが決定した（一五名参加）。

一二月一日の第二回合同研究会では、各委員の研究の方向性について議論し、令和七年二月に最終報告書を刊行・提出することなどが決められた。

第二期の調査プロジェクトでは、江戸時代の『淡路名所図会』（当館蔵）と、『淡路分間絵図』（淡路三市蔵）を重視するが、このうち『分間絵図』については、令和五年度中に専門業者によるデジタル撮影が実施された。

詳細は「歴史遺産活用」コーナーの藪田貫論文を参照のこと。

またこのほか各委員が、沼島漁協所蔵資料、沼島神宮寺所蔵資料、洲本市立淡路文化史料館所蔵文書などを調査するとともに、各地の現地調査を実施した。

五、研究室ホームページ

研究室では平成二七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを独立して開設した。しかし一昨年度から博物館全体のホームページに統合して運用し始めた。催し物の案内のほか、研究室の調査活動や研究成果を取り上げている。

また昨年度末には、前掲のように『播磨国風土記』と赤松氏と山城研究班の研究成果コンテンツを立ち上げ、今年度中に「たたら製鉄」研究の成果がアップされる予定である。

六、今後の方向性

ひょうご歴史研究室は開設以来、まもなく一〇年目を迎えようとしている。開設時以来の『播磨国風土記』研究班は令和三年度末に、赤松氏の山城研究班も昨年度末に解散し、またたたら製鉄研究班も、今年度末に一区切りつける予定になっている。

残されたメンバーの間では、県民の期待や意向に如何に答えるか、また博学連携をどう進めるかなど、さまざまな議論を重ねていく予定である。

（以上、文責は坂江渉）

主催：公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
共催：兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

ふるさとの歴史講座 神戸校

ひょうごの山城（やまじろ）と赤松（あかまつし）氏

南北朝時代から戦国時代まで戦乱に対応して山城が営まれ、その構造も次第に複雑化していきました。兵庫県のなかでも播磨地域には多種多様な山城遺跡が現存し、その歴史をたどることができます。この講座では、ひょうごの城郭の歴史全体をたどりながら、そこで活躍した赤松氏の歴史とあわせて紹介します。

【会　場】兵庫県民会館３階３０３号室又は兵庫県学校厚生会館２F大会議室
【時　間】午後２時から３時30分まで （月曜日）
【年間受講料】一般：１７,０００円　　※友の会会員：１３,０００円
※兵庫県立美術館「芸術の館　友の会」、兵庫県立歴史博物館友の会会員も対象

【日程等】

	実施日／会場	講座内容	講師
①	４月１０日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	ひょうごの山城と赤松氏	元兵庫県立考古博物館 山上　雅弘
②	５月８日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	城山城（きのやまじょう）の興亡 －古代山城から中世山城へ－	たつの市教育委員会 歴史文化財課専門員 義則　敏彦
③	６月５日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	白旗城と上郡町の赤松氏関連遺跡	上郡町教育委員会生涯学習課 総務・文化財係係長 島田　拓
④	７月３日(月) 兵庫県学校厚生会館２F大会議室	城館遺跡とかわらけ	兵庫県立大学教授 中井　淳史
⑤	９月４日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	赤松一門の構造と戦争	ひょうご歴史研究室客員研究員 関西大学非常勤講師 大村　拓生
⑥	１０月２日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	山城研究の最新技術	兵庫県立考古博物館学芸員 永惠　裕和
⑦	１１月６日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	坂本城と置塩城（おじおじょう）	姫路市埋蔵文化財センター館長 大谷　輝彦
⑧	１２月４日(月) 兵庫県民会館３階３０３号室	ひょうごの戦国城郭	元兵庫県立考古博物館 山上　雅弘
⑨	１月１５日(月) 会場調整中	上月城（こうづきじょう）と利神城（りかんじょう）	佐用町教育委員会 藤木　透
⑩	２月５日(月) 会場調整中	山城と赤松氏研究の遺産	兵庫県歴史博物館長 兼ひょうご歴史研究室長 藪田　貫

※ 都合により、日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

【問い合せ】 公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
〒650-0011　神戸市中央区下山手通４－１６－３
ＴＥＬ（０７８）３２１－２００２
ＦＡＸ（０７８）３２１－２１３９
e-mail：sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和４年度（承前）～令和５年度
「ひょうご歴史研究室」現地調査等一覧

大阪湾岸と淡路の地域紙研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	２／24㈮	資料調査	兵庫県立津ミュージアム、兵庫県立考古博物館、西宮市立郷土資料館	1	展示資料の熟覧調査
	３／２㈭	現地調査	兵庫県立津ミュージアム、清盛塚、能福寺、福海寺（神戸市兵庫区）他	1	資料調査と現地調査
①	５／５㈮	資料調査	明石市立文化博物館	1	展示資料の熟覧調査
②	６／16㈮	資料調査	葛城市歴史博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	1	展示資料の熟覧調査
③	６／20㈫	資料調査	兵庫県公館行政資料室、神戸大学附属人文科学図書館	1	資料調査
④	10／25㈬	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	展示資料の熟覧調査
⑤	11／５㈰	資料調査	和歌山県立紀伊風土記の丘博物館、和歌山市立博物館	1	展示資料の熟覧調査
⑥	11／10㈮	資料調査	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	1	資料調査

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	２／９㈭	現地調査	春日神社、加古川流域滝野歴史民俗館、光明寺他（加東市）	1	史跡調査
	２／12㈰	現地調査	若狭野天満神社（相生市）、法雲寺（上郡町）、白旗城（上郡町）、円応寺跡（佐用町）他	3	史跡調査

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	２／９㈭	現地調査	白猪屯倉址（真庭市）、久米歴史民俗資料館、久米廃寺他（津山市）	5	現地調査
	２／10㈮	現地調査	鉄のふしぎ博物館、松原八幡神社、姫路市埋蔵文化財センター	3	現地調査
	３／８㈬	現地調査	安積山遺跡、安積氏館跡、宍粟市歴史資料館、御形神社（宍粟市）	5	現地調査と資料調査
	６／24㈯	現地調査	奥天児屋鉄山跡周辺（宍粟市）	3	現地調査と撮影
	10／30㈪	現地調査	奥天児屋鉄山跡周辺（宍粟市）	4	現地調査と撮影

令和４年度（承前）～令和５年度
「ひょうご歴史研究室」研究会一覧（敬称略）

コア会議

	日付	場所	内容	人数	備考
①	５／７(日)	ハイブリッド形式	令和４年度の活動実績と令和５年度の方針・体制案について	13	
②	12／16(土)	ハイブリッド形式	令和５年度の活動実績と今後の取組課題について	11	

大阪湾岸と淡路の地域史研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	３／18(土)	ハイブリッド形式	・坂江　渉「「鳴門の渦潮」世界遺産総会での「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの成果」報告について」 ・古市　晃「６世紀のミヤケを拠点とする地域ネットワーク―淡路・阿波・但馬・美作―」	19	
①	６／11(日)	ハイブリッド形式	・禰冝田佳男「弥生時代大阪湾をめぐる物流の道」	21	
②	10／21(土)	ハイブリッド形式	・古市　晃「桑田玖賀媛・播磨速侍伝承とその背景」	19	

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	２／19(日)	ハイブリッド形式	・大村拓生「文献史学の立場から見た赤松氏と山城の成果と課題」 ・山下史朗「考古学と文化財行政の立場から見た赤松氏と山城研究班の成果と課題」(紙上報告)	18	

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	３／11(土)	ハイブリッド形式	・田路正幸「奥天児屋鉄山跡の調査について」 ・松井良祐「網干・加藤家文書－宍粟鉄山の鉄荷請払帳の分析－」 ・藪田　貫「宍粟のたたら製鉄関係」	19	
①	５／14(日)	ハイブリッド形式	・村上泰樹・土佐雅彦「「たたら入門解説書」(図録副読本）の第Ⅰ素案について」	16	
②	９／24(日)	ハイブリッド形式	・村上泰樹「「たたら入門解説書」(図録副読本）のコンテンツ案について」 ・永惠裕和・笠井今日子「図録の個別原稿案について」 ・藪田　貫「大阪商業大学商学史博物館のたたら関係新出史料について」	19	

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	７／１(土)	淡路県民局	第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第１回研究会	15	
②	12／３(日)	淡路県民局	第Ⅱ期「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第２回研究会	20	

令和5年度　ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

（敬称略）

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】（11名）

室　長	藪田　貫	兵庫県立歴史博物館　館長
☆ 副室長	市村高子	兵庫県立歴史博物館　次長
参　与	中元孝迪	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧　問	山下史朗	兵庫県企画部地域振興課　歴史資源活用専門官
顧　問	大国正美	神戸新聞社　常務取締役　[7年目から]
研究コーディネーター	坂江　渉	兵庫県立歴史博物館　ひょうご歴史研究室
共同研究員	大谷輝彦	姫路市埋蔵文化財センター　館長［2年目から］
協力研究員	村上泰樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　次長
研究員	中村　弘	兵庫県立考古博物館　館長補佐兼企画広報課長［4年目から］
県教委事務局	柏原正民	兵庫県教育委員会事務局文化財課　課長
☆ 県教委事務局	服部　寛	兵庫県教育委員会事務局文化財課　副課長兼文化財班長

【大阪湾岸と淡路の地域史研究班】（13名）

◎ 研究コーディネーター	坂江　渉	再掲
客員研究員	古市　晃	神戸大学大学院人文学研究科　教授
☆ 客員研究員	禰宜田佳男	大阪府立弥生文化博物館　館長
客員研究員	大村拓生	関西大学　非常勤講師
共同研究員	伊藤宏幸	淡路市教育委員会社会教育課［5年目から］
共同研究員	金田匡史	洲本市教育委員会生涯学習課　文化振興係長兼淡路文化史料館長[8年目から]
共同研究員	定松佳重	南あわじ市教育委員会埋蔵文化財調査事務所　主任［8年目から］
共同研究員	神戸佳文	元兵庫県立歴史博物館　館長補佐
☆ 共同研究員	多賀茂治	兵庫県立兵庫津ミュージアム　学芸班長
共同研究員	池田征弘	兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　調査第2課長[7年目から]
研究員	永惠裕和	兵庫県立考古博物館 主査［2年目から］
研究員	竹内　信	兵庫県立歴史博物館　学芸員［6年目から］
県教委事務局	大本朋弥	兵庫県教育委員会事務局文化財課　主査

【たたら製鉄研究班】（7名）

◎ 協力研究員	村上泰樹	再掲
客員研究員	土佐雅彦	元兵庫県立篠山東雲高等学校教諭［3年目から］
共同研究員	田路正幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課　専門員
☆ 共同研究員	加納亜由子	兵庫県企画部地域振興課　主任（兵庫県立兵庫津ミュージアム）
研究員	藤田　淳	兵庫県立考古博物館　社会教育推進専門員
研究員	吉原大志	兵庫県立歴史博物館　主査［4年目から］
☆ 県教委事務局	園原悠斗	兵庫県教育委員会事務局文化財課　技術職員
県政推進員	長澤喜史	兵庫県立歴史博物館　ひょうご歴史研究室

※　☆新メンバー、◎リーダー

【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】

座長	藪田　貫	ひょうご歴史研究室　室長
委員	坂江　渉	ひょうご歴史研究室　研究コーディネーター
委員	古市　晃	ひょうご歴史研究室　客員研究員
委員	大村拓生	ひょうご歴史研究室　客員研究員
委員	木村修二	神戸大学大学院人文学研究科　特命講師
委員	平井松午	徳島大学　名誉教授
委員	町田　哲	鳴門教育大学大学院学校教育研究科　教授
委員	金田章裕	京都府立京都学・歴彩館　館長
委員	竹内　信	ひょうご歴史研究室　研究員
オブザーバー	山下史朗	兵庫県企画部地域振興課　歴史資源活用専門官

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会

臨時職員	福永明子	

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

（設　置）

第１条　兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。) を置く。

（場　所）

第２条　研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

（所掌事務）

第３条　研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

⑴　兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。

⑵　調査・研究成果の普及に関すること。

⑶　調査・研究成果の活用に関すること。

⑷　その他兵庫県の歴史研究に関すること。

（組　織）

第４条　兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

２　室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

（庶　務）

第５条　研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

（補　則）

第６条　この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附　則

この要綱は、平成27年４月１日から施行する。